
猫旅

ダーズリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫旅

【Nコード】

N8283Y

【作者名】

ダージリン

【あらすじ】

ある日突然、異世界へとやって来たサクラ（雄猫）。そこは動物しか存在しない世界だった。人間のように物を器用に扱い、人間のような仕草をする動物達。そこへさらに魔法まで加わっている。そんな未知の世界で、サクラは元の世界へ戻るための手掛かりを探すため旅を始める。これは、面倒臭がり屋で俺様な白猫サクラと仲間達のほのぼの冒険物語。

第1話 猫、異世界へ・・・

やあ、諸君。突然だが吾輩は猫だ。名前はまだ無い。・・・・・・
・・・いや、今のはウソだ。名前はちゃんとあるぞ。このセリフ一度言ってみたかったんだよな。

でだ、なぜいきなりこんなことを言ってみたかったかというと、吾輩・・・いや、俺は異世界トリップとやらをやらかしてしまったよ
うなのだ。現在何処かも分からないジャングルに居たりする。そう、
自分は今、非常に混乱しているんだ。

猫の無いに等しい、小さな小さな脳みそがぶち壊れてしまうほどに
現在フル回転中である。

どうしてこうなったのか・・・・・・時は数時間前に遡る。

俺、桜井サクラは暑い暑い夏の真昼間、扇風機の前でぐだぐだと寝
っころがった。全く、夏になると忌々しいだけさ。この毛・・・

ちなみに、この名前。俺はまだ納得していない。

何が悲しくて雄の俺がサクラなんて名前付けられなきゃなんなんだ。
しかも、名字まで桜付いてるし。

さくらさくらってダジャレかい！この名前考えたのは我家のお母様。
彼女はお花が大大好きなんだ・・・・。ついでに家は花屋だ。

なのに我家にはお母様以外男しかない。お父様に、長男の柊、次
男の椿。兄弟どちらも花の名前。そして俺も。

ここまで揃えるとは、すごい花への執着だ。お母様・・・・

あ、話しズレた。えっと・・・そう、異世界トリップした事につい

てだった。

で、今日もいつものようにのんびりと猫らしく、過ごしていたはずなんだが、はずなんだが……

なのであの時散歩なんて行っただよ。俺…………。

……ホント、行かなきゃこんなことには……正直、異世界トリップする寸前の失態がアホすぎてそれが何より悔やまれる……。

……あれは、俺が外を散歩している時に起こった。塀の上をトコトコと歩いていると、いきなり悪餓鬼どもが俺に石を投げてきた。なんてしつめのなっていない餓鬼どもだ。親の性格も知れる。

奴らが鬱陶しかった俺は猛ダッシュで塀を駆け抜けた。あ、勘違いするなよ？ 決して逃げだしたわけじゃないぞ。奴らが相手にもならないほどのお子ちゃまだからお咎めは無しにしてやったんだ。

餓鬼どもの攻撃から逃げ切った俺は走るのを止め、またのんびりと散歩を満喫する、はずだったが……

俺は油断していた。ちょうど歩いていた塀の中の庭で、ばあちゃんがホースで花や木に水やりしてたんだが……

なんちゅー水の勢い。そんな威力の水かけられたら花萎れるぞ、ばあちゃん。と、一応、花屋の看板猫？ としては言ってやりたかったが、そんなことよりも非常事態発生。

自分がばあちゃんのパワフル放水に吹っ飛ばされとった…………。吹っ飛ばされるだけならまだしも、飛ばされた先は水路の中。また水かい……俺は濡れるんだったら、もういくらでも濡れると思って、落下回避を諦め、そのまま水路へドボンッ。

……で、気づいたらこの変なジャングル？みたいな場所に居たというわけ。

まさか水路の中にジャングルがあるなんてこと、猫の俺でも信じやしないから。これはきつと異世界トリップというやつだろう。と推測したんだ。

さて、別の世界に来てしまったわけだが、もう考えてもしょうがないと俺は思い始めていた。過ぎたことを悔やんでも、もとは戻らないし。これからの事を考えることにした。

これからどうしようか。

とりあえず、腹減った。何か食いモン探さんと……

餌ってどうやって探すの？

生まれて一度も野生生業やった事ないからな。キャットフードしか食べたことないし。

俺って、何食えんの？やっぱ、魚？なんか猫っぽいしな。

うん、魚探そう。で、魚はどこに居んのかな。やっぱ川か……？
とりあえず、川探そう。

サクラは草むらを掻きわけ、ジャングルの奥へと歩いて行った。

第2話 檻の中

結局、川は見つからなかった・・・

やばい、腹ぺこぺこ・・・。駄目だ俺のスリムな体がさらにスリムになってしまふ。食い物は何処・・・

フラフラしながら一歩、また一歩と歩き続けること30分。サクラはやっとの思いでジャングルを抜けた。少し達成感を感じかけたサクラだったが、一瞬でそれは消え去った。

サクラの目に映る景色は、どう見ても一面砂のオンパレード・・・

「何なんだよ・・・これ・・・」

実際に見たことは無いが、テレビで見たことがあるぞ。これは砂漠と言っやつだ。

もう俺の体に砂漠を越える気力は残っちゃいねえ・・・

「砂のバカ野郎ッ・・・あ、もうダメ」

——バフンッ。

サクラは砂漠の端っこで前のめりに倒れた。

* * * * *

・・・ガタンッ・・・ガタンッ・・・ガタッ

「・・・んあ？」

激しい震動にサクラは目を覚ました。

・・・ここは何処だ？俺が意識を手放した場所は砂漠の熱い砂の上・・・だったはずだが、今下敷きになっているのはどうやら冷えた鉄のようだ。それにしても暗い・・・俺、目開け

てるよな？……ま、何でもいいや。とにかく、一刻も早く食料調達しねえと。俺死んじゃう。

サクラはとりあえず立ち上がって一步踏み出した……。瞬間――

ゴツンッ！！

かなり鈍い音が響き渡った。

「…………ツツ……！！イってえ…………」

何かにぶつかった。多分鉄だ……。ぶつかった処に手を伸ばしてみた。どうやら全面鉄という訳ではないようだ。所どころ手が突き出せる。

……。ありや？……。この縦に並ぶ鉄の棒……。あまり考えたくないが、もしかして俺、檻の中に居るのか？

……。……。なんで俺捕まってるの？……。もう訳分かんねえ……。考えんの疲れた。寝よ……。

激しく揺れる暗い檻の中でサクラはまた眠りに着いた。

当然、寝心地は最悪だった。

* * * * *

サクラが次に目を覚ました時、彼は大勢の見世物となっていた。当然、檻に入れられたまま。

（何で見世物になってんだ？俺。しかも相当珍しそうに見てんなあ（皆さん）

呑気にそんなことを考えているサクラだが、実は内心かなり動揺している。囚われの身だからではない。サクラの最も動揺する点は、彼の周りを囲む民衆たちの姿かたちだ。はつきり言って人間は一人

もない。いるのは動物ばかりだ。動物と言ってもサクラの居た世界のそれとはかなり懸け離れている。彼らは二本足で歩き、言語を扱い、衣服まで纏^{まと}っている。そう、まるで人間のような仕草をしているのだ。

（・・・ここは動物の世界なのか？なら俺は珍しくないだろう。俺だって動物だ。猫様だ。見世物になる意味が分からん）

サクラは不思議に思い、一度自分の姿を見て、再び大勢の民衆たちを見渡す。・・・何か、違和感を感じた。

（・・・んん？・・・あら？？）

サクラはじいゝツと見物人たちを凝視し、ある事に気づいた。

（猫がいねえ・・・）

これだけ色んな動物がいるというのに定番中の定番である猫がいない。犬はいるのに何で猫がないんだ。普通この二種類はセットだろうが・・・ポチとタマのタマはどうしたんだよッ！・・・もしかして、猫がこの世界にいないから俺、こんな感じに見世物になってるわけ？

ま、いいや何でも。とりあえずこの檻から出ないとな。ここに居たって元の世界には戻れんし。

んん・・・どやって出よう？俺マッチョじゃないし、この檻ぶち壊すのは不可能。俺を檻に閉じ込めた野郎と穏便に話し合って鍵開けてもらうとか？・・・そっちの方がさらに不可能か。あゝあ・・・もしここで大爆発でも起きたらこの檻ぶっ壊れるかな・・・いや、そんなことになったら俺、また別の世界に行っちまうわ。天国という名の世界に・・・

とりあえず、ダメもとで檻の格子に力を入れてみる。押しても、引いても、叩いても、蹴っても、ビクともしない。だんだんムカついてきた・・・マジこの檻大爆発でもして吹っ飛ばねえかな――

本気でそんな事を考え始めたサクラは、突然体に違和感を感じた。

（・・・何だ？体の中が熱い・・・何か力が漲^もってくるみたいだ）
漲るエネルギーは体の中心から手へと徐々に移動していく。すると、

掌に赤く輝く光の球が出現した。その不思議な球はどんどん大きくなっていき、ついに自分の顔のサイズほどまで膨らんだ。

「な、な・・・何だこりゃッ！どうすればいいんだ、コレッ！！！」
俺が不思議な球に動揺していると、俺を見物していた奴らが血相変えて逃げて行く。

「えッ！！ちよ、ちよっとッ何で逃げんの！！何、コレって逃げるほどヤバいのかッ！！！！」

周りの反応にさらに動揺するサクラはコレをどうにかしようと必死に考えてる。はずなのだが、

「どうする！どうするのッ！投げちゃう？コレ投げちゃう？コレ投げてもいいもんなわけッ！！！」

サクラは大混乱していて、まともな考えが思いつかない。あたふたしていると、光の球がより一層輝きを増した。

（———— ツ・・・これは何かもうヤバいんじゃないっ！）

結局、投げつける以外にも思いつかなかったサクラは格子目掛けて思いっきりぶん投げた。サクラは投げてすぐに地面へ伏せる。そして、格子と光の球がぶつかった瞬間

ドッガラガッシャッツツツツツ——————ンツツツ！！！！

！！！！！！

大爆発発生。檻は木端微塵だ。うん、俺の望んだとおりだ・・・望んでみただけで、本当に起こるはずじゃなかったんだけどさ。後もう一つ、想像してた結末にやらんで良かった。俺はまだ天国へ旅立ってはいない。

サクラは瓦礫の中からゆっくりと起き上がる。辺りはさっきまでの活気は何処へやら・・・瓦礫と自分以外何も見当たらない。みんな逃げたのか、それとも巻き込まれたのか・・・うん。前者ということにしておこう。これは不可抗力だ。

「はあー・・・どうしょ、これから・・・」

元の世界に戻るって言っても手掛かり自体どうやって掴めばいいんだ。これからの果てしない面倒事に嫌気がさし、サクラは大きな溜息を吐く。すると、突然……

ガラッ……ガラン

瓦礫が持ち上がった。

第3話 ウサギとの面倒な約束

瓦礫の中から現れたのは、綺麗なグレー色の毛並みをしたウサギだった。片側の耳には、レースのりぼんを着けている。彼女は土埃を振り払うように頭を軽く振った。それを眺めて、ずっと呆けていたサクラはやつと我に返る。

（ヤッベ——・・・いたよ被害者・・・どうしょ・・・やっぱ謝つといたほうがいいよな。でも、もし許してもらえず訴えられたら、その時は逃げる）

逃亡計画を立てつつ、サクラは被害者ウサギに近づいき話しかけた。

「あの・・・えと、大丈夫？」

ウサギはサクラの方を向き、笑顔で答える。

「ええ、大丈夫です」

ウサギの穏やかな口調に少しホッとしたサクラは、早いこと謝って退散しようと思った。

「ああ・・・と、この爆発、俺のせい・・・たぶん。とりあえず、危ない目に合わせて悪かった。・・・それじゃッ」

そう言つて、頭を下げたサクラは直ぐに顔を上げ、回れ右をし走り去ろうとした。が、失敗。なぜかサクラの鼻先には鈍く光る剣先が迫っていた。サクラに刃を向けているのは、これまたウサギだった。焦げ茶の毛色をしており、片目には傷がある。

「貴様、ラピス様に何をした」

傷ウサギは、サクラを睨みつけながら低い声で問うた。彼の威圧に少々ビビりながらも、どう説明していいのやらと考えあぐねるサクラ。

「何を・・・と訊かれても、俺だつてよく分かんないんだけど。なんか、俺の中から出てきた光の球が爆発して、彼女を巻き込んだんじやつたとか・・・」

サクラ自身何が起こったのかさっぱりなのだ。訊かれてもまともな答えなど答えられるわけがない。傷ウサギは、剣をそのままサクラに突き付け、ジロジロと見てきた。

「……貴様は何者だ。なぜ貴様のような者がこの世に存在している」

続けざまに質問してくる傷ウサギに、サクラは嫌気が差してきた。答えてやるもんかよッ！と、心の中では強気な事を言ってみるが、実際には鼻先の刃が恐ろしく、素直に答えちゃったりする。

「何者って……見ての通り猫ですが」
「……」

傷ウサギは片目を細くし、沈黙した。

おいッ！そこでだんまりかよッ！！こちら嫌々ながらも答えてやっただけだよ。

「とりあえず剣を収めて」

今まで静かに事の成行きを見ていた”ラピス様”と呼ばれていたウサギが、傷ウサギに注意をした。傷ウサギは大人しく言葉に従い、無言で剣を収める。サクラは、とりあえず今死ぬことはないと分かり、小さく息を吐く。

「突然の無礼な行為、お許しください」

ラピス様は丁寧な口調でサクラに非礼を詫びた。

「いや、こっちこそ。危ない目に合わせたし……」

そう、危うく殺してしまふところだった。本当だったら俺が謝られることなどあり得ないのだが。なんだか罪悪感を感じつつ、へらへらと苦笑いしていると、突然ラピス様が変な質問をしてくる。

「大変失礼なことをお聞きますが、貴方様は今までのように生きてこられたのですか？」

「……は？どのようにって、普通にのんびりと生きてきたけど。猫だから」

事実をそのまんま答えただけなのに、何故かラピス様は怪訝な表情をする。

「・・・猫なのに、ですか？」

いや、猫だからだろ？何でそんな当たり前のこと訊くんだよ。

「さっきから何がそんなに不思議なんだ？俺を見物してた奴らもそうだったが、猫はそんなに珍しいのか？俺のいた世界じゃ、猫なんて腐るほどいたけどな・・・」

「いた世界？貴方様は異世界から来られたのですか？」

「んん・・・多分ね。俺、この世界の事全く知らんし」

ここが、俺にとって異世界なのは確実だ。人間がいなくて、動物だけなんてあり得ないし。よく経済成り立ってるな・・・。

思考が逸れて、変なことを考え始めたサクラに、ラピス様は話を続けた。

「・・・そうですか、少々信じ難いですが、それなら貴方様が今、ここにおられること自体は納得がいきます」

「納得つて、なんで？」

「貴方様はこの世界に来てから、自分と同じ者を見ましたか？」

「いや？見てないけど」

「貴方様と同じネコ族の方々は100年前に滅んだのです」

「滅んだつて・・・戦争か何かで？」

「はい、ネズミ族との戦いに敗れ、ネコ族は全員皆殺しにされました」

へ・・・だからこの世界には猫がいないのか。そうかそうか、戦争で負けたのか。ネズミに・・・ネズミに？

「え・・・はッ？ちょ・・・ちょちょちょッ！ネズミッ！！ネズミに負けたの？猫が？こんな小つさなネズミにかッ？」

サクラは両手で、蜜柑の大きさくらいの形を作った。

「・・・？そちらの世界ではネズミ族はそんなに小さいのですか？こちらのネズミ族は貴方様と同じ位の大きさです」

ええ・・・ネズミが俺と同じ大きさつて、キモッ・・・。

「・・・マジかよ。何？これってもしかして、あれか？下剋上とかいうやつ？」

「ゲコクジョウ？」

ラピス様が俺の意味不明な言葉を聞いて首を傾げた。

「あ、いや。こっちの話」

気にしないでくれ、俺も最近知ったんだこの言葉。次男椿が歴史の勉強してた時、傍でたまたま聞いてたから、なんか使ってみただけ。よくあるよね、覚えてたの言葉を言ってみたくなる時って。

「今の話で分かってもらえたと思いますが、貴方様はこの世界に存在する筈の無い方です。ですからあのようには捕えられ、見世物にされてしまったのです」

「うん、まあそこそこは理解したけど。で？俺は元の世界に帰れると思う？」

彼女に訊いたところで分かるはずもないと分かっているが、訊いてみたくもなる。他に何も方法がないのだから。

「いえ、残念ながら正しいご返答はお答えできません」

いや、別にいいんだよ。そんな真面目に答えようとしなくて。訊いてみたかっただけだから。と、そう言おうとしたサクラよりも早く、傷ウサギがズバンと言い放つ。

「ラピス様は何も悪くありません。そんなこと、こいつが自分で考えればいいだけの事」

いちいちム力つく奴だな。こいつ。

「はいはい。あんたの言うとおりだよ。んじゃ、俺は行くから。さいら」

片手をひらひらと振りながらその場を去ろうとするサクラをラピス様が引きとめた。

「あのツ、お待ちください」

「まだ何か？」

「貴方様の帰る方法、私も一緒に探させてください」

「はい？」

何言ってるんだ？このウサギさん。まあ、手伝ってくれた方がこっちとしては有難いが・・・。

呑気なサクラとは裏腹に、傷ウサギは慌てた様子。

「ラピス様ッ！何を考えてッ」

しかし、ラピス様は傷ウサギの問い詰めをスルーした。

「その代わり、貴方様にも手伝って貰いたいことがあります」

なんだ、条件付きかよ。ま、ただで上手い話なんて転がってこないよな。

「で？何手伝えればいいわけ？」

「はい。私どもと共に、救って頂きたい人物がいます」

「救ってほしい？誰を」

「ノースウサギ国の王族です」

はー・・・何かいろいろ突っ込みたいけど、王族のところだけ突っ込むことにした。

「何でいきなり王族？あんたの知り合い？」

サクラはあまり興味な下げに訊く。

「はい。私の家族です。私はノースウサギ国第三王女です」

「へー。あんたお姫さんなんだ」

サクラの態度に傷ウサギがキレる。

「無礼者ッ！！貴様この方のご身分を知ってなお、その態度をとるとはッ許さん！！」

大声で怒鳴り散らす傷ウサギにサクラは片耳を手で押さえ、気だるげに返す。

「知るか。俺の世界じゃ、んな動物に王族なんてものねえし」

サクラの更なるいい加減な態度に、傷ウサギは身を乗り出す寸前だった。

「——ッ貴様」

「止めなさい。ウォーレン」

お姫様の一喝。傷ウサギことウォーレンは、一度サクラを激しく睨んだ後、渋々黙った。

「申し訳ありません。この者は直ぐに頭に血が上ってしまふのです」
従者の無礼を詫びるお姫様。あんたも苦勞するね。お姫様。そう

思いつつ、ウォーレンにあっかんべえーをするサクラ。ウォーレンは眉間に深く皺を刻んだ。

「で？なんで余所者の俺にそんな大事なこと頼むわけ？王様助けるなら、やっぱちゃんとした奴の方がいいでしょ。兵士さんとかさ」

サクラの言葉を聞いて、ラピス様は一度苦笑した。

「貴方様のおっしゃる通りです。しかし、私どもの国はもはや敵の支配下となり、兵士たちも囚われてしまいました。兵士たちや兵士たちの家族は互いに身の安全を考え、敵に反抗意識を見せません。そうになると、国の民は私の行動に賛同して下さらないでしょう。ですから、どなたか・・・お強い方を探しておりました」

ラピス様の説明にサクラはうんうんと頷く。

「んで、何かよく分かんけど、すごい魔力を発揮してしまった俺に頼むと？」

「はい、私たちには貴方のような強力な魔力を持った方が必要なのです。無茶を承知で・・・どうか、お願いします」

切切と首を垂れるお姫様を見て、サクラは溜息を吐いた。

「・・・俺が王族を助けたらさ、本当に帰る手伝いしてくれる？」

「勿論です。一生を賭けてでも、必ず貴方様が元の世界へとお戻りになれますよう、お手伝い致します」

「・・・分かった。契約成立」

サクラの了承をラピス様は心の底から喜んでいる様子の笑みを見せた。しかし、サクラの心境は複雑だった。

正直、そんな嬉しそうな顔されても困るんだよね。本当に助けられるか分かんないし。てか、魔法の使い方んで分かんねえし。あまり過度な期待はご遠慮したいものだ。

「んで？これからどうすんの？」

あまり乗り気ではないため、適当に訊いてみた。

「・・・とりあえず、マントを購入しましょう」

「は？何でいきなりマントが出てくるわけ？」

「・・・お前の脳みそは飾りか」

今まで黙っていた傷野郎がいきなり出しやばって来た。

「あッ？」

サクラは傷野郎を睨んだ。ラピス様はそんなサクラ達を見てため息を吐く。

「貴方様のお姿は、とても目立ちますから」

「あ、そゆこと」

サクラは納得した。

俺、この世界じゃ珍しいんだっただな。でも、何だ？てことは、これからずっと姿さらしちゃダメってことか？・・・面倒くせ――・・・。

「ところで、まだ自己紹介をしていませんでしたね。私はラピスと申します。こちらは私の従者、ウォーレンです」

あれ、まだ自己紹介してなかったっけ？話長すぎて気づかなかった。

「俺はサクラ」

「サクラ様ですね」

サクラは鳥肌が立った。なんじゃ”様”って・・・。

「あー、様は無し。なんか固っ苦しくて面倒。サクラでいいよ」

「・・・分かりました。では、サクラ」

「はいはい？」

「改めて、これからよろしくお願いします」

ラピスは深々とお辞儀をした。

「こちらこそよろしく」

そう言っ、次にサクラはウォーレンの方を向いた。

「君もよろしく」

「・・・」

ウォーレンは渋い顔をしただけだった。

「無視かよ。ま、いいけど。逆にお前に仲良くされてもキモいだけだし」

サクラはウォーレンに悪態をついて視線を外した。

あーあ……俺が王様を助ける？何だ、このヒーロー的な展開。似合わなすぎて笑えてきた。俺は面倒事は嫌いなんだ。誰かを助けるなんて、一番面倒なことじゃねえか。さっさと帰る手掛かり見つけておさらばしよ……。

サクラは溜息を吐きながら、瓦礫の上を気だるげに歩いて行つた。

第3話 ウサギとの面倒な約束（後書き）

前作から結構日数が経ってしまいました。申し訳ない。次話からはやっとなサクラの異世界での旅が始まります。お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8283y/>

猫旅

2012年1月15日01時51分発行